

北九州市立文学館紀要
第6号

2024年3月

北九州市立文学館

【資料紹介】

宗左近〈縄文〉ノート

解題・翻刻(2)

稲田大貴

小野芳美

本稿では前稿「宗左近 〈縄文〉ノート解題・翻刻(1)」(北九州市立文学館紀要5号、二〇二三年三月)に続き、宗左近(一九一九〜二〇〇六)の詩集『縄文』(思潮社、一九七八・一一)の創作ノート三冊のうち二冊目「縄文から続縄文へ」を翻刻・紹介する。本ノートの翻刻は主に小野芳美(二〇二三年四月より北九州市立松本清張記念館所属)が行い、稲田が確認・修正した。

ノートが書かれた期間、体裁について再度記す。「縄文から続縄文へ」は、表紙に一九七七年の八月二八日と、二月二八日の二つの日付が記され、一二頁までは『縄文』および続編となる『続縄文』(思潮社、一九八〇・一一)の構想、スケジュールが記され

ており、こちらは一九七七年八月二八日の記述である。二〇頁には「詩集『縄文』のためのノートの続き／(1977年2月19日)」とあることから、ここからが一冊目の「縄文 長篇詩ノート」からの続きと考えられる。ノートはマルゴノート株式会社製、マルゴノート。体裁はB5版、182mm×257mm)、一〇〇枚。

前稿では三頁目、および一一五頁の記述について触れたが、加えて一か所、内容について触れておきたい。四頁目にアメリカの作家エリカ・ジョングの小説『飛ぶのが怖い』(柳瀬尚紀訳 新潮社、一九七六年一月、原書は一九七三年出版)の一節、「彼らが死んだのにどうして自分は生きているか? そこで彼は自分の生を死に似させたのだ」が引用される。宗は太平洋戦争で友人たちを喪い、自分が生き残ったことに負い目、あるいは疑問を持っていた。その感情にこの言葉が響く。宗は「自分の生を死に似させ」たのだからか。三五頁には「あの世へいったものはこの世へ帰ってきてばかりいた。／境界などといえるものもまだでき／てはいなかった。」と記す。これは生と死の境界がない時代としての縄文のことであろう。宗が詩

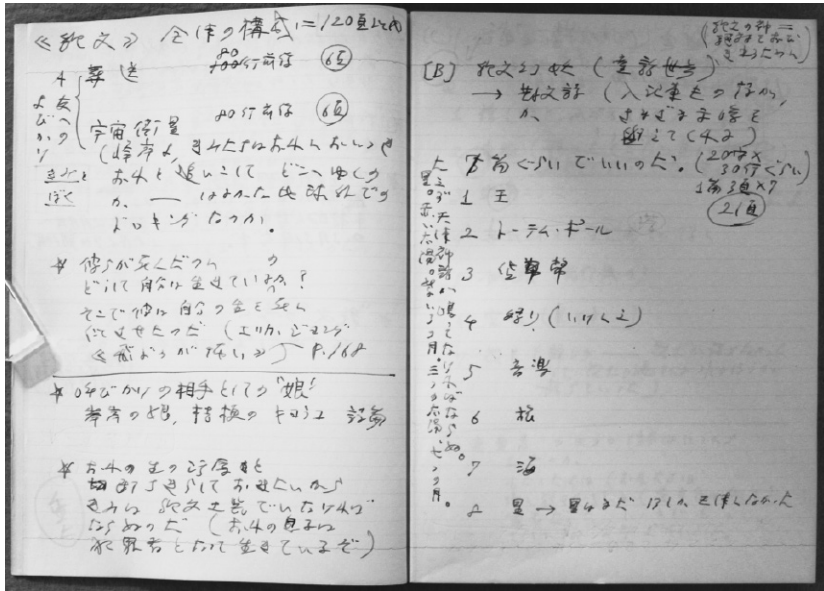
集「縄文」で試みたことは、生と死の境界を、縄文を媒介として揺るがすこと、そうして死んだ友人たちの「魂の器」として詩集「縄文」を編むことⅡ「鎮魂」をなすことであつた。その過程において、「自分の生を死に似させ」ることが必要であつたであろうことは推測に難くない。生と死の問題は、宗の詩業を貫く大きな問題系である。それにアプローチする一つの手がかりがここに示されている。

(いなだ だいき 学芸員)

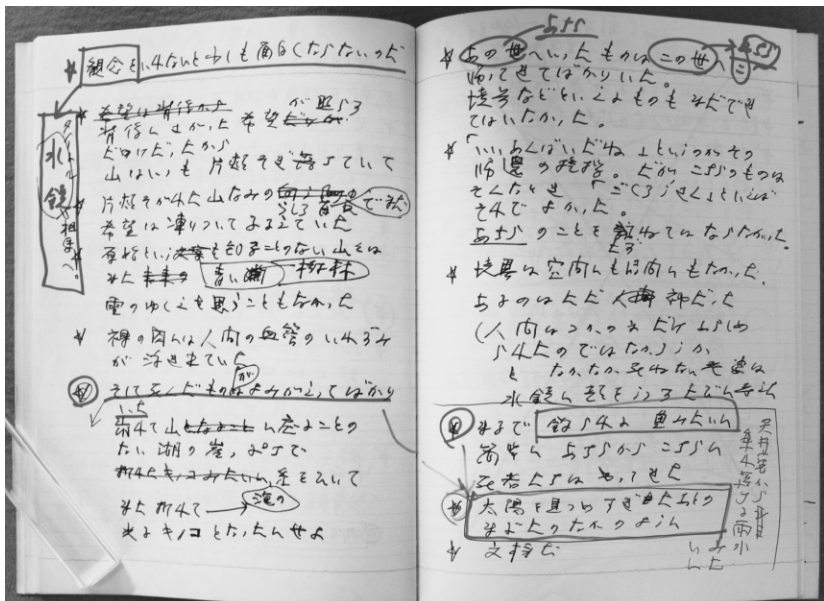
【凡例】

ノートの翻刻は次の方針に拠る。

- 一、本資料は横書のため、同様に横書で示した。そのため、始まりを本誌背表紙側とした。
- 一、旧字体、異体字は原文通りとした。
- 一、仮名遣いは、原稿の通りとした。
- 一、誤字、脱字と思われる箇所も資料の特性上、原稿の通りとした。
- 一、判読できない文字は■とした。
- 一、削除部分は、判読可能なものは二重取消線で、判読不能な字は■とした。
- 一、本資料は赤色、青色のペンによる書込が多数あるが、印刷の都合上、すべて黒とした。
- 一、本文中に、今日の人権意識に照らして不適当な表現・語句があつた場合でも、原文の芸術性・歴史性を考慮してそのままとした。



縄文から続縄文へ 4、5頁



縄文から続縄文へ 34、35頁

主な寄贈資料

二〇二二（令和四）年度

■橋本多佳子短冊 三点

寄贈者 富家滋子

受入月 二〇二二年五月



北九州市ゆかりの俳人・橋本多佳子（二八九九～一九六三）直筆の短冊。俳句は、

三句集『紅絲』所収のもの。「箸とるときはたとひとりや雪ふりくる」「蘇枋の紅戻る齡ひ同じうす」「いたどりの一節の紅に旅くもる」

■伊地知進原稿 二点

寄贈者 竹之内靖方

受入月 二〇二二年六月

伊地知進（一九〇四～一九六六）は、福岡県生まれの小説家。陸軍士官学校卒業。上海事変従軍時の戦記を『火線に散る―上海実戦記』（欽英閣）として発表した。ともに陸軍報道部に勤めた火野葦平と交友があった。作品が映画化され、直木賞候補になるなど注目されたが、戦後は筆を折った。

寄贈資料は、伊地知進の草稿「北京の娘軍談師（女ゲリラ隊長）」「孤愁十年」の二点。

■音楽教育に使用された楽譜等資料 一式（楽譜、書籍）

寄贈者 廣澤元彦

受入月 二〇二二年七月

大正から昭和初期、教育機関で使用されていた楽譜
二二六点、書籍二点。

敬文館（東京）、共益社書店（東京）、新響社
（東京）、セノオ音楽出版社（東京）、大阪音楽
学校 楽友会出版部
（大阪）、成楽会
（静岡）などの出版
社を中心に、唱歌や
合唱曲の楽譜シリー
ズが含まれる。楽譜
には、童謡、西洋の
歌曲、オペラやオペ
レッタからのアリア、合唱曲、軍歌な
どがあり、西洋音楽
の受容過程や、当時
活躍した作曲家、作
詞家などを知ること
ができる。



■文学関連書籍 一式

寄贈者 藤井百合蔵

受入月 二〇二二年七月

中古、中世及び近現代の文学作品、研究書、事典類
など一三九冊。

■佐木隆三関連資料 一式（自筆原稿、自筆資料、
書簡、写真、執筆資料、書籍、印刷物など）

寄贈者 末松詠子

受入月 二〇二二年八月

佐木隆三（一九三七～二〇一五）は、北九州市ゆか
りの小説家。八幡製鐵所勤務を経て、一九七六年、
「復讐するは我にあり」で第七四回直木賞を受賞。北
九州市立文学館初代館長を務めた。

寄贈資料は、自筆原稿（「ジャンケンポン協定」ほ
か）、スケジュール手帳、裁判傍聴時等の取材ノー

ト、書簡、写真、スクラップブックなど九八一点。

■芥川賞・直木賞関連資料 一式(書籍、原稿)

寄贈者 竹之内靖方

受入月 二〇二二年二月、二〇二三年三月

■横山白虹・横山健堂・横山哲夫関連資料 一式
(書画、書籍など)

寄贈者 横山哲夫

受入月 二〇二二年十一月

横山白虹(一八九九〜一九八三)は、北九州市ゆかりの俳人、医師。俳誌「自鳴鐘」を創刊、主宰し、現代俳句協会会長のほか、小倉市議会議長、北九州文化連盟会長なども務めた。横山健堂(一八七二〜一九四三)は白虹の父で評論家、ジャーナリスト。横山哲夫氏(一九三三〜)は白虹の長男で、工学博士、俳人。長崎大学学長、長崎原爆忌平和祈念俳句大会会長などを務めた。

寄贈資料は三人の著作のほか、白虹の書画、自鳴鐘会員の句集など一〇七点。

第一回から一五九

回(平成三〇年上半期)までの芥川賞・直木賞受賞作の所収本及び初出掲載誌、受賞作家の第一著書、初期作品、直木賞作家・伊藤桂一の自筆原稿など七九三点。

■麻生久関連資料 二九点

寄贈者 麻生壽々代

受入月 二〇二三年一月



北九州の詩誌「沙漠」の代表を長く務めた麻生久（一九一九〜二〇一〇）に関連する8mmビデオテープ。

麻生久については、数次にわたり、書簡、日記、自筆資料、写真、視聴覚資料、愛蔵品、書籍、一般雑誌、同人誌、資料ファイル等の寄贈を受けており、本資料もこれに続くもの。

■劉寒吉関連資料 二点

寄贈者 濱田源一郎

受入月 二〇二三年二月

劉寒吉（一九〇六〜一九八六）は、北九州市出身の小説家。火野葦平、岩下俊作らと第二期「九州文学」の結成に参加した。郷土の歴史や人物を書いた作品に「山河の賦」「黒田騒動」などがある。

寄贈資料は、劉寒吉の新聞小説「西国の獅子」の切抜き、及び「有明の鷹」の切抜きの複写。「有明の

鷹」は「竜造寺党戦記―竜造寺と鍋島」と改題し、刊行されたが、「西国の獅子」は書籍化されておらず、貴重な資料である。

■横山白虹関連資料 一式（書画、書簡、雑誌など）

寄贈者 板井月

受入月 二〇二三年三月

ゆかりの俳人・横山白虹ほかによる書画、白虹書簡、主宰誌「自鳴鐘」のバックナンバー（一九五四〜一九六九）など。

■リリー・フランキーこども文庫 一式

寄贈者 リリー・フランキー

受入月 二〇二三年三月

リリー・フランキー氏（一九六三）は、北九州市生まれのイラストレーター、作家。小説『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』（扶桑社）で第三回本屋大賞を受賞した。ミュージシャン、俳優としても活躍する。北九州市が主催する「子どもノンフィクション文学賞」の選考委員を創設時から務めている。

第五四回北九州市民

文化賞（二〇二二年度）の受賞にあたり、副賞で子どもへ本を贈りたいというリリー氏の申し出を受け、文学館内に「リリー・フランキーこども文庫」を設置した。



【186頁】

☆ ぼろぼろ 崩れてゆくのは
ぼくの手のほうのようだね

☆ サヨウナラはあるさ ただ
サヨウナラそのものが 崩れて
ゆくのだね

☆ まだきみたちといっしょに この世の
燃えていたとき 清潔で
ぼくが はしなくも 作った
(23くらいの青いぼくがさ)
大昔のうたを ここを もってくる
まったく 少しも 違いはないのだね
(40■年前とさ)
崩れるか 崩れないかの違いだ
けでさ ■ うたも

☆ ゆうばえ (の詩一篇を
ラストに書くか)

【187-189頁】

空白

【190頁】

☆ 大ラスト

④海

↑

波をおしやるように
わたしはおしやることのできるの
だろうか

砂の上で ぬれないで
波の上から ひきこまれないで
(何を)といわないで
なぜ 未来へむけて
押しやることのできないのか

【191-200 頁】、【裏表紙裏】、【裏表紙】

空白

【134頁】

《相馬》のための23行（または25行）
6月10日に提出する作品のための
Notes（78'、4月25日午前0時半）

タイトル → というよりテーマ

《貨幣》◎

☆ 貝、骨、石斧 → これを貨幣にしたほうが面白い

別の星から落ちてきた ——
女がのって。

☆ 見出されたのはカケラばかり
(みがくのは少年)

☆ ■みがいても 光り出さない
とき
それが貨幣となるのか
(愛はいつだって光っていたの
だから)

【135頁】

☆ 鳥はまだ鳥かごを知らなかった

☆ 一個しかない貨幣

☆ 落してもひびわれない悲しみに
するために 貨幣をみがく

☆ 王を出すか

【136-183頁】

空白

【184頁】

ラスト

☆把手
装飾

(77年
4月14日
考えはじめ)

☆ みねぎし、じゃあ 握手

☆ はせがわ ” ”

☆ かみさんごう

☆ たかはし

☆ とらいわ

☆ きみたち、名前の違いほどには
手のあたたかみ 手の強さが
違いはしないんだね。

【185頁】

空白

【123頁】

☆ ■■

円球がある。これを転がして
からでないと、死者は地下に
はいれない。

【123-125頁】

空白

【126頁】

☆ プロローグ、葬送
エピ

☆ きみたちから 夢みられた夢の
なかの生きもの、
それが ぼくでありうるわけは
ない

☆ ぼくの夢みる夢、それが
きみたち■■なのではない

☆ ぼくに夢はない、
きみたちが食いつぶしたから。
ぼくの夢の外にいて
ぼくの夢をくってふとって
そのために ますます ぼくの夢の
なかにはいれなくなっている
ものたちよ。
きみたちにあいにゆくために
ぼくは もう一つの 夢のたてももの

【127頁】

縄文の土器と土偶へはいつてゆ
くのだ。

【128-129頁】

空白

【130頁】

☆ エピローグのP

☆ きみとわたしをたせば 一人前
の男になるのだろうか。
たぶん一人前の土偶になるので
はなかるうか (8月25日)

☆ 噴き出させうる方のコトバを
のんで米 そのコトバを 聖なる
オトに還元して光らせている
ために
おお ひびわれている 土■■器よ

【131-133頁】

空白

【116頁】

☆ なぜ 消えたネオン塔か
 ということとは 違うのだ。
 遠くなくっちゃ いけないだけ
 ではない
 帰ってゆけないくらい 遠く
 なくっちゃいけないだけで
 はないのだ

【117頁】

⑥ 石をなげる。その石に引きずら
 れてゆくということはないのか。
 ひもでもついているみたいに。

☆ なげられた石がなおも動いている、
 まちがえないでくれ、
 縄文からこちらに投げつけられ
 た石のお話だ

モリを打ちこむ。

【118頁】

⑨ 装備

軍帽よ、短剣よ、小銃よ、長靴よ、
 で
 そしてそれらを ■縄と鋼鉄と布と
 機幾何学の林をつくっては
 こわしていた号令よ

おまえたちは もう壁のなかで
 凝固した

8月15日の青空の
 昭和の20年の、すぐ向うに作品があ
 るか

作品のすぐ向うに■原始はあり
 (縄文よ) ありえない。

【119頁】

空白

【120頁】

☆ 縄文の 労働、汗、^{ママ} 歓喜を書か
 なきゃ。原始の健康を

→ これ書けばこそ、ここにいない
 ミネギシたちを書けるというものか。

【121頁】

空白

【122頁】

⑩ 殺戮

☆ 死者を永遠に平和ならしめるに
 はたぶん死者をもう一度殺さな
 くてはならない。

だが、峰岸よ、いったい誰がきみ
 にそういう■殺戮を加えうるの
 だろうか。

☆ だからきみよ、おれのなかだけに
 住め、そして、おれが 殺されるとき、
 おれと一緒に死んでしまえば
 よいのだ

【107頁】

☆ 見えないものを書くのだ、
 ツマ ツマラナイ 作品はやめろ
 判る文章は おかしいのだ

おしゃぶり
 と 死んだ母の音がする
 (若い)

①→地表からすかしてみえる 浅いあたりに
 埋まっている土偶■から
 (横になっている)

【108-109頁】

空白

【110頁】

⑦ 花火 (眠りの花火を→※111頁①へ
 打ちあげる)

【111頁】

①→作品、こ■のくらの数で終りにして
 いいよ。(7篇くらい)
 (このパートの)

【112-113頁】

空白

【114頁】

⑧ なぜ 縄文 なんだ

なぜ縄文か
 21世紀の手前に わたしがいる
 から
 (どうしてだろう掘りだされた
 土偶はいつも片足もがれてる)

つきの。めされたのだから
 ぼくは。

なぜ 縄文か。
 裏切りの断層が
 層

さけて 崩れて
 もりあがってきたからか

【115頁】

☆ きみたちが殺されなければ
 縄文などなかったのだ

☆ 死んでからうみつけた赤ん坊

☆ 「あちらから」
 こっちは近ずけないのだ
 ガラスごしなのだ
 たとえ掌でさわっていても

あちらから いきなりやってくる
 わたしのなかへ

胃カメラ みたいに

【94頁】

③ ごっ■こ — 女
 お医者さまごっこ ↔ 戦争ごっこ

☆ なぜか女はいとわしかった
 (縄文時ではなかったのだろうか)

☆ 縄文と「おれ」を断ちぎったのは何なのか

【95-97頁】

空白

【98頁】

④ 恋以前 = 恋以後
 いつも恋のなかにいると思いがらの
 ことがない。

☆ 死者はなぜ sexe を失うのか。
 わたしは夢でむかしの女を抱きもどせる。のか。

⑤ 沼からうまれた雲は が まだ
 沼にを おおって離れようとしてない
 — 沼が雲になろうとしている。
 沼が雲になろうとしている。のか。
 沼を浮上させないために
 どんな水藻をしげらせなければ
 ならないのか。

【99-101頁】

空白

【102頁】

⑤ 飢餓 (飛行機のもつ
 飢餓だ)

☆ 峰岸の恋と子供のこと。

【103-105頁】

空白

【106頁】

⑥ 空襲

星の空襲なのだ

だからこそ 死ねるのだ

スミ

☆ 星の散弾を打ち込まれて死 した
 男の死骸 身体 口から
 目玉のなかに黒い空 ほぐれて
 から青い空が吐き出されて
 動かなくなった
 糸になって

スミ
||
人形ひとがた
として独立させた。

「なぜ縄文」にいれた

—※107頁①へ

額のイレズミは消えている

から ので

スミ

誰かが 片足むしっていった

まんまと

【86頁】

黄年詩

主語 きみは

このパート以後 散文詩だな

① 橋

水平ではなかった 垂直だった

☆ すべての物語は過去にあり
物語の再現は未来にしかなく
(死なねばならなかったさ)
現在はひどく扁平? だった。

☆ 吊り橋はいつもゆれている

《相馬》
ここから
にら

(たえず渡っている人がいるのだ

声 だけはいつもこちらに帰ってきた

こだま

(谷はそのぶんだけ広がったのだ)

× 渡り終えられている

【87頁】

76年11月22日、ここから考える。

☆ 時間が一つではこまるのだ
過去、現在、未来、それだけの
時間でも足りはしない。

→ ということを書くのだ。
事件を一つ語りながら(具体的に)

戦

きみは恋した きみは、死■■■した

きみの子供が生まれた

これを語ろうとしているわたし
のいまの時間だって三つはあつ
たのだ

戦後すぐ、■■■10年後死にた
がっていたとき、そして 今から
1年前女を裏切ったとき

◎ だが、いま、もう一つの時間がひらけた
それか きみの生れる前なのだ、 } これ
つまり おれの死んだ後なのだ }
を とともに生きる 時間、それが
どうしたわけか 纏文なのだ。

↑
おそらくは おれを その奥に
吸いあげていってくれる時間だ、
墓の時間だ

【88頁】

☆ なぜ縄文か (前頁から)

◎ これ 独立させて

序のパートの三番目くらいにおく

【89頁】

空白

【90頁】

② 書物

(歌のでこない
美しい檻)

☆ 読んでいる少年は
ぼくでなくてきみであってよ
かった

峰岸よ 上参郷よ

☆ (赤い唇)青んだ白目にひろが
る空

【91-93頁】

空白

【83頁】

☆ 星は流れおちた隕石となっているだけだ、あの世から流れ落ちてきたにせよ、星はもうこの世では ■隕石■であるにすぎない。のだからうか。

のなかには

☆ おびたしい貝の死骸ほそれでも ■ あまい粘液のつくる小川が流れている だからこそよろよると さかのぼってきてひどく赤いタマゴをウミつけにくるシャケがいる

☆ ——どんなタコにもヒゲがないようにこの王には ヒゲがなかった

☆ ■■ (やぶられた人骨がまず油をぬられて ——人間のだ——灯りとなったか

☆ 星をつかんだまま化石している掌

網の中心にいる王

☆ おのれのおののきの ■■か (よって おのれをつつみこんでいる)

クモノ網のなかのクモではない

☆ イケニエがクモの糸を切るのだ。

【84頁】

☆ これ以下 戦争を直接に書く →
||
現代のイメージを多用すること
(77年 ■8月24日~77年4月30日まで)

きみとぼく。きみ=峰岸
ぼくは縄文人で、どうしてありえないのか。

錯雑したスタイルで書く。

☆ 上参郷、長谷川、虎岩、高橋、峰岸(おれは裸で雪の上に)

男知らぬ
女にわるい
から(とって
打始前に
娼婦を
だく

【85頁】

王 王には弟がいる。
さきに生れて、王のもとにあ
らわれでることができないた
めにだけ弟であることわか
る イキモノが

【81頁】

- ⊙ 埋れている土器の上の土をはがすように(こわれるまで掘り起されることはないのだ)
少女の皮から悲しみをはがす■とその下に星はないのか
- ⊙ 星もまたむさぼりくわれるだが誰もそのとき 湖のなかしかのぞきこんでいない
- ⊙ タマゴをうみつけにくるシャケ。
- ⊙ つるんでくる蔓(つる)草の■
ねばっこい■ 掌のなかの月
- ⊙ 氷のなかの雲をへりからむしる
■ ときほぐす
■ 黄金色の■ 蜘蛛 あたかも自分のはきだした網でもあるかのように
- ⊙ 井戸のなかに「いけにえ」が沈められる
「鳥」すると
地平のどこかで スミレが
灯りがともるか

【82頁】

- ☆ 物語が夜を暗くしていたのか。
- ☆ スジコみたいに 多弁密集の花を [死体は] 咲かさなかった事 [土偶は]
- ⊙ 物語のなかに降る雪の
ついにつもらない大地よ
- ☆ [雪よりも前につもっていた物語
絶えず燃えて■冷たい逃げ水]

■ のなか
 ■ 鱈に似た
 魚のタマコが
 ふ化する。
 にウミツケラレタ

- ☆ 王■の前で (て)
槍はいつも垂直に立ちあがった
あごを、崩れたあごを
あげた。

☆ タイトル (王)

⊙ [王はいつまでも若かった
 まるで生れる以前みたいに
 (寸)]

【79頁】

◎☆ 鹿の目 ↔ いけにえ。

もっともっと
フクラマセ
ル

☆ いけにえに 墳
墳
墳 墓はなかった。

☆ 空とぶもの を いけにえに ■ するのを好まなかった

◎☆ いけにえ = 目。
■肉はむさぼられ、目だけが埋められた？ どこに？

- ◎ 地面を(土を)ける ひづめの■音が聞えた
(塩は 塩が 切れた水草の ように ゆれて 流れていた)
- ◎ いけにえを要求するものは何なのだ、おぼろげにそれを ひきずり出せ。
- ◎ 神殿などはたてられなかった。
タイマツと籐だけが組みあげられていた——すぐ崩れるようにと野っ原で。

☆ 夜のうちに(闇のうちに)生きたものはムサボラレテ、目だけが枝に吊されていた

【80頁】

◎☆ ← ■「いけにえ」と合体させる事。(9月13日記)

自分たちはもう星の落し子だと誰も信じる事ができないでいた
S F 世界を超える事

が星となるとき、
取られた男は死ぬのだ

- ◎☆ 突きささった礫を中心にして
- ◎☆ 掌に水をすくう すると
突きささった礫が向うむきの星となって 赤いものを吐いて背中を光らせている
- ◎☆ 星の映っている湖。
物語が夜を暗くしていたのか
夜が暗いから恋人たちほ の
胸を あわせた胸に星を
招きいれなければならなかったのか。

【74頁】

→ タイトル **家屋** **H**

- ☆ 石■斧でできた(石垣)垣根
- ☆ 礎でできた■窓枠。
- ☆ 木の檜でできた柱。

- ☆ 童話みたいに、さまざまなオカシナもので、家をつくってみよう。
- ☆ そこに出はいるするのは、何だ。神さまと蟻と、時によっては
- ☆ タマゴをうみつけてくるシャケ

(いつか 家は水のなかになっていて)

(妊婦はどい<こでも尊敬されたから)

☆考

- ◎ これは10行詩あたりになって独立するか

【78頁】

☆ いけにえ **考** もっとフクラマ

説話に

せよ

I (9e)=これで終りだ。

散文詩に!

◎ひどく小さな瞳の浮かんでる小さな湖

☆骨

樹木

いつもコワレタ岩がころがつていた。白い鳥の骨は白くなくてはならないのに。

- ☆ なぜ 生きながら 目を見はったまま 殺されなければならぬのか

サイゴに

- ☆ 目には 矢はまづ 目に突きさる 世界がそこに この世があのに根を突きさすようにと

【75頁】

重要

- ☆ 石斧をふりおろすとき 死刑執行人は ゆるしをこうただし死刑囚ではないものに対して。

【76-77頁】

空白

- ☆ 人間が豚であることを知る瞬間 自分もこうだと知るから、人と心をおそれが貫くのか。

人間の肉は生きたまま 食べられるためであったのか

鹿の目が

闇の肉のなかにきらめく星は 食べられ そこにのみこまれた あの鹿の目に であるに違いない

【72頁】

titleとしてはリンリを使わない

⑤' 倫理の花

☆石斧

◎ 禁忌

丸太

☆ 倫理の■カン木が組みたてて
夫木

いる廃屋。//そこを電光がさし貫いたあとに花が咲く。
その花を美しいと思わねばならぬ。

☆

■自分の身体のそとを歩いていけ
ないと思こんでいる男

るのでは

☆ 肉のなかで どうして磁針があろうか
むしられた花となっている磁■針が
あるだろうか。

☆ 樹脂

☆ 花がそのまま車輪となるか。
しかし 身をおこして

☆ 自分の身体の外からだけ愛撫の手は
こないと信じている しか 女たち

【73頁】

暗示にして疑惑を！

☆ 水が水のようにかぶさるのだ。
土
息をつめたものは、おのれのなかから白い骨が突きでてゆく
のを知る、肉が流されないようにと。

◎ ☆ 後悔を叩きわる平たい石■斧の面に

☆ 男はいつも薄い浮彫りになっている。

☆ 子供のアタマほどの■をこじあける
石斧 星

☆ 具の形ほどの子供をこじあける石斧。
星 屑

☆ 落ちてきた星を石斧で割って
王を引きずり出してきた男
以来男はもつとも薄い浮彫りにな
って壁に立っている
口をあけて なぜかしら口をあ
けて

◎ 星でないものにする！ →何だ？

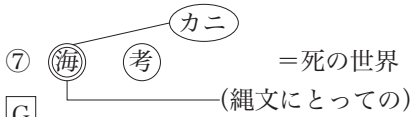
骨？ 化石？

(花の化石か 泪の化石か ——どっちでも
ないのだよ)

【66-67頁】

空白

【68頁】



G

海の墓

すべての のみ

☆ 問いを抱えこんでしまっているから海の底はあくなく泥で静まっているのだ。

→ おうとして波立っている

海。

☆ すべての答えをのみ 吸いあげてしまっているからなのか、空が白いのは。

☆ 原初

↓

海は何であったのか。おそれを返して海を書く。 はじめてのものだ

◎ 誰も海にはいらず、まして泳ぐことはできなかった

【69頁】

☆ 海の水はなぜ塩からかったのか。甘かったら人間たちが呑みつくしてしまっていたらうから？

☆ カニを主人公として書く。

○ 波なぎさから消えないアブクのなかに取残されている夕焼け。

☆ 海から這いあがってくるものはみな、おしつぶしてしまう。

☆ 敗北した海との斗いが器に刻まれるのか

し

☆ 海からきたものは海にかえへてはならぬ禁忌のつくる明るさのなかに閉じこめられていたものたちの背中の壁はまた明るい波立ちであったのだろうか

【70-71頁】

空白

美しい

☆ 花から毒をとるこつくることを知っていた

◎ 毒が美しい夢を夢みさせることを知らなかった。

☆ なぜ毒なのか。

その見させる夢が [美しい]

ため からだ。

☆

死の闇のなかに突っこんで咲いているからだ

【63頁】

ゆらりと (この言葉はイヤ、訂正の事)

☆ 壺が流れだす。そのとき壺の下にあるのは、星座に違いない。

これはムツカシイ = ヤハリ 深鉢のふちにかざり、とか、壺の形 とかに逃げなければならぬのか。

→ を支えているのか ものこそが星座だ。

【64頁】

◎ (王) = 死の崇高を!

(F)

78年2月3日から“相馬”のためにトリカカル事。

☆ もつれ出るケムリの糸として 思ひ出が夢がほぐれ出たのではない。

☆ 夢のトンネルを掘らしたのも、土器を焼かした

押し もの
もう夢はトンネルをへつぶすことしか

考えぬもの、
王。

土器

そこから

☆ いつも割られるためにミケンに星を求めているもの、王

☆ 死の王。死のなかで君臨することが生者に絶対権をふるえる秘密なのだ。

☆ → もっともっとイメージ引き出せるはずだ

☆ うまごやへゆく と 馬のかわりに見えない王が のいることがある、

◎ クモの巣のなかのクモノ目玉にだけ映って。
やがて帰ってきた、馬のいばりのしぶきのなかに 濡れて

【65頁】

しょぼたれた虹を立てるものがあれば、それが王であるに違いない。

のタマゴ

☆ 王には小供がいない。小さなタマゴが ワラのなかで 納豆みたいに 糸をねばつかせた目の光をながして女王のワラのなかにくるまっていて、それはいつまでもそのままである。

☆ 星をつかんだまま■化石している掌

指紋ま、王のおののきま。

中空に刻まれている
彫られている指紋

☆ もう二つほどの王のイメージを!

【60頁】

塔——木と石の交互に積みあげられたおかしな塔。

つい骨みたいな塔

塔

⑤ ナーテムポール

☆ 雲もまたノリモノ

E ただし 海をこえるためだけの(天上にはのぼらぬ)ノリモノ

に しないため

☆ 雲にのるための塔

ナーテムポール。

だからそこには鳥がはめこまれていたが 目をむいていた

~~☆ 降伏のしるしの旗 [青い] 星に旗が■ひるがえって [赤い] いなかったか、いつも。~~

☆ 旗。いつもひるがえっている花びら。乾きあ 落ちてくる雲をたべている。むしられて に られ

○ 違うのだ むしられていつもひるがえっている大きな舌。落ちてくる雲をのみこもうとしている 口のないう舌。

【61頁】

☆ 虫が鳴いている。

☆ 生きたまま記念碑となっている大木(雷鳴が花飾りとなって)

☆ 成長する化石。これの対は何かの魚のトリ

☆ 成長することに専念 するため ■化石の魚は 泳がないか 鳥は とばないか。

○ ただ むかし 食べられた虫が 鳥に 化石の そとで鳴いている

☆ その声をはこぶ風だけがなま臭い

☆ 大空と大地の間に立って、決して双方に届かないでいるために 立っているもの塔

【62頁】

⑤ 永遠と転変

☆ 星座はどうして壺のなかにはいつてこれなかったのか。そのために壺はひびわれた。

☆ 星座はどうして壺の面に凍りつ■かなかったのか。

の空

【57頁】

① 少年たちそれで胸を飾っていた。
大人たちそこにつぶされた瞳を
見ていた。

スミ

- ☆ 少女をほしいとき少年は胸を に
■光らせているものと交換した
- ☆ 一人一人の指の ユビの爪みたい
なものだったから、それは決して
流通することがなかった。
剥がされて血をこびりつかせない
かぎり。
- ☆ 血糊のつくるもの、一個しか
ない貨幣 そのなかになお
血が流れていたか。

②—うまれるもの

- ☆ 勾玉と貨幣の相互交換。
- ☆ 貨幣のなかに青い血が流れだす
ときそれは少女の胸に■はりつ
いて勾玉となった。

【58頁】

原始の上に りつめ 金属の—
 ☆ 二■こに—張△ている△氷がある
 そして よ。
 むここの貨幣△のなかで
 さける氷の■光りがある
 音 落せば ←

してもひ
びわれない
堅い悲し
みよ
流通貨幣よ。

- ☆ まだ 集められた蜜はなし
ほんのりと炎えるものが<は
いつも 清い甘い 甘い草の
匂いがした
- ☆ それに唇をあてているうちに
遠くへ ふくらんでいたものが
現代の ふくらんでいたところが
果して むかしなのだろうか
いまなのだろうか。

- ☆ もう一つポイントの中核がない
のだ。
- ☆ 貨幣の見つからぬところに
墓は(ふんぼへは)あるのか
- ☆ 古びて使用価値をもてなく
なるものは貨幣でなし
(愛はいつだって光っていないのだ)

【59頁】

☆
なぜ掘り出せるところに■貨幣はないのか
まるでどこにも愛の形がないよう
に (人間の手から手にかわされた)

- ☆ 握った手のぬくみの残っている
骨がないまうに。手のぬくもりし
か残っていない貨幣
- ☆ 交換可能なものはなかったのか
(何だったのか)
- ☆ 鼻の輪ではなくて
指輪は、二つの手を結びつける
通して抜けない一つの輪は！

山のうへの流木
タコ目。 コウモリのツバサ。

【53頁】

☆ 空の青さのなかを泳いでいる

☆ 花びらのなかをさまよう ■の影が

灯り

☆ 夢のなかを流れる魚の水泡の [青さ] が
影が 乳房の白さのなかを [影]

おもてを ただよっている

☆ 小川の 少年の悲しみをくわえて
のなかに 吊りあげられてきていた魚
が帰る小川を見失っている

☆ 閉じられた花びらのなか を [た] [を]

小さな灯りが さまよっている

蜜の [灯]

その影が空を泳いでいるのは
その影ではなからうか

終わらない

終わっている夢のなかを

水泡 夜光虫の光がまたたいている

(その影が)乳房を量をぬらしている
のはその影ではなからうか

【54頁】

そびえる 少年 ■は
夜の

岡のいただきで で
夜明けの山のいただき に ■ ■ ■ ている
木舟が ■ ■、掘り出される

埋められている

で扁平な 小舟が 小舟をとかす(か)
えぐられた形が目似ている

て

【55頁】

空白

【56頁】

④ が丸い、わけ。

④ 貨幣 魚の目、魚の口。

☆ 絶えず外の星から落ちてくる
ものがあつた(別の女たちの
到着の乗りものだった)

☆ いつも 見出されるのはカケラ。

※57頁①へ

少年たちそれを組みたてていた 外
の星への願いの乗りものとしようと
していた。

いっこうに光り
ださないうき、

☆ 失敗したとき、 ■それが貨幣
だった となった

☆ 鳥はまだ鳥籠を知らず しかし
鳥のためにもう鳥籠は組み立て
られていた

☆ 少女の ■乳房を口でつついて

※57頁②へ

はじめて記憶に辿りついた (魚)
記憶が突起してくる

ココカラ
始メルカ

魚の尾がくねりながらはえてくる。

たえずしたたり落ちてくるもの
があつた

掌でうけとめたとき それが
星であると少年は信じなけれ
ばならなかつた だろうか。

【51頁】

☆ 小石たちは口を閉じていた
割られる前の貝みたいに

噴

~~☆ 器物たちは炎を吐き出すことを
やめている。めまい
こわれるために~~

☆ 炎を噴き出す石 氷柱
して くねる

雲を吐き出して 沈む石 草原
折れる枯木

☆ たたきへし折られた木

☆ 日本ジカ、イノシシ
クルミ、シイ、クリ、ドングリ。
ヤマイモ。

中期 = アケビ、ノブドー
ワラビ、木の芽、フキ、
セリ、キノコ

移入→ 大麦 小麦、ソバ、ダイズ、
アズキ、ソラマメ、マクワ
ウリ、スイカ、モモ、アンズ、
アサ、クワ
ウシ、ウマ、ニワトリ

【52頁】

③ 祭

いくつもの祭り (イケニエとなる
ことによってしか、祭りを通りぬけ
てゆくことはできない)

☆ 祭りを通りぬけることが男の祭
りなのか

■■■■

ハギとられた カキのあとよ
すすりこまれた カキの肉よ

☆ 77年8月20日(東洋大姫路高校が
11回裏千葉捕手のホームランで
優勝。
東邦高校の一年生投手坂本がいい

☆ 詩の思いがなかなか言葉として
ふぎ出してこない。思考に凝固の
ある証拠だ。

☆ 何を歌おうとするのだ。
(夢) を描く。それでいいのだ。

☆ 影
湖
空の青さ(に) ■■落す影

☆ ~~ひびのいったタマゴみたいに
空がにじみでないものを
かかえて ふくらんでいる~~

☆ 少女の胸のうえで一瞬のうちに
流れをかえた白い川

☆ 取り残された魚

☆ 魚はひからびないために少女の
胸のなかに 泳ぎいった

☆ 記憶にたどりつくようにための
ように少女の胸を に 口で
つつく魚

【50頁】

タイトル「旅」 C

【49頁】

① → 花はいつもうしろむきにしか咲かない
死んだ蜂がそこにもぐりこむようにと

◎

☆ 記憶のかわりにどうして未来が
楽器とならないのか。

☆ もう一つ、思想がでてこないぞ。
殺される、つぶされる

☆ 旅のおわるところに湧きでてい
るもの

☆ 歌だろうか。器の破片があぶくを
ふいて、むれている。

☆ 舟

③ → 水を吸うために

☆ 泥のなかをつきすすんで
ひびわれている舟

☆ くりぬかれてしか 浮ばない舟
木の舟ほうかばない

☆ 掌のなかではじめて小鳥を死
なしてしまっただ少女

☆ いつも 折られている立木
半分に

☆ 鳥の■■むくろのくわえている
枯木

☆ 空の青さ、をしたらたせる滝
の したたり落ちている
露草

いただき

☆ ~~山の なか で発見される小舟。
そちらに ■むけた背のうしろで
木舟のなかから立上る少年。女。~~

☆ ~~乳房■■はたえず青い闇をまとい、
■■ていたのが。~~ をにじみ
出させ

不動明王 = 火に焼かれている、いや
 炎のなかの (母ではまずい) 父か。
 兄だ 兄
 蛇 (= 叔父だ)

☆ 返ってくるこだまにひきつれられてくる風はない。針をきらめかして突きささってこないか。

のひきつれた目よ。

◎ 顔はない。ただ目だけが目に似た渦巻きが身をそらして

【47頁】

原始の火から原子の火へ
 土から ■何の土へ(コンクリートか)

⊙ 網■にかかって、^{ぼたついで} 網をまくらせびくつかせている■ませいる
 大空

白い大空

網の目を切るとき
 どうしても切られる大空のはじめ
 ひどく青い血がしたたる

白い

☆ 旅 ←→ こだま ←→
 こびりついている血がとけるだけ■だ
 (もう血は流れでることがないのか) この言葉は使わない

☆ 旅なのか。旅にしては宿駅があるまい。さまよわねばならぬ。さまよいつきたところから、しかし、はじまる移動ではなかったのか。

☆ 疲れ果てたのではないのだ。
 ◎ 切なさがお■燃えているのだ。
 ◎ 夢はきえたのか。しかし、夢のなかで燃えていた太陽が、なお残っているとしたならば、野火だ

【48頁】

◎ 旅 C エロスのない神はない。
 しか花は咲かなかった—※49頁①へ

☆ 通りすぎたあとに、未知の花が咲いた

で の が口を開けている。

☆ こちらの海■ワニ■頭へあちらの海■でワニの尻尾が宙をうっている。それほど男の陸への旅する口の陸は細長かった。つまり、それ自体がまた一匹のワニだった。

☆ = ■ゆでられた卵に似■て空がまるくなっていた (そういうところがあるのであつて)

☆ 廻行がどうして旅なのだ
 しかし また 空間の上の移行
 だけが どうして 旅なのだ

☆ 死者をもとめての旅

☆ そのおかし であると同時に
 おびやかしであるような。

☆ 記憶のみが音楽をつむぎ出す楽器
 であるならば 楽器はこわさな
 ければならない。

タ
マ
ゴ

☆ 旅 うすいスリが■ラスのなかを走る
 ■■ ひびきのひび。 の隠花植物。

【45頁】

☆ ふるえないものは (肉)ではない。
 肉の奥から呼び出されないもの
 は音楽ではない。

☆ 低い空。あまりにも低いために、
 地面までもう空になったと見え
 てくる空。
 ? (二枚の空をへだてるのは何だ?
 の死骸

☆ しかし、星はいつも水の底にう
 まっているから
 星にくいこんだ石鏃…
 男は歩き出さねばならぬ。^

☆ いくつもの集落があるだろうか。
 いつも窓の よろいどのしまった一
 家の家の前をすりぬけて走らねば
 軒
 ならぬ

→ぼんやりと破けていて
 (黒い太陽よ)

☆ 夢に似て 夢よりも視界は「せ
 まくてトンネルになっている

☆ 男のはいているものがワラジか
 サンドルか男自身にもわからな
 い。ただ、それが

◎男は 舟に似たもの であることだ
 けはウスウス 知っている、目が
 ないために おそろしく気まぐ
 れな心を もっている舟に似た
 …

に乗っている スミ

【46頁】

☆ 倫理のない美はない および
 倫理の引きさかれたところにしか
 美はない → これがテーマだ

☆ 復讐の神から逃げる旅
 復讐を忘れる そのことから
 復讐される旅だ

これは、どういうイメージになるのか。

【40頁】

自然

☆ 折半された火山湖の 断面 片頬
垂直に → そぎすてられた → と犬歯

☆ 吊り橋

■ 蔓と書こうとして
どうしても夢と書いてし
まっていた少年詩。

☆ 山、川、海、森、林、雲
野は
林の燃えつきた燠

☆ ときおり壺に窓あけて そのまま
窓わくとなってしまう蟹もいる

~~☆ 壺はこわれやすかった
蟹は破片をくわえて
水平線の向うに後退しようとして
はいつも舞台を右に左に横ば
いするだけだった~~

【41頁】

☆ わなにかかった鳥
わざと巣をこわす鳥

☆ あぶり出す

~~☆ 挟られて吊り橋となってしまった虫
山の稜線~~

【42頁】

☆ この詩集には
少年詩 → のパートが必要だ。
☆ 6篇ぐらい

☆ おれの黙示録だ。
60行くらいで一篇だけでいい

☆ 大きな鳥がいつも火山のなかか
らうまれていた。

【43頁】

空白

【44頁】

暗示にして
疑惑を！

[B] (妖 鈍 幻) (縄文の神)
主語 ほとんどが散文詩
男は 35字×25行 前後

ここからは始める

① ■ (音楽) → (旅) (C) エロスの
なかの神

第 1 行 このパートの全体が旅なのだ、
宿所はあっても ハタゴはない

~~◎ じっとしていることができない。
卵がうまれている。
女の身体だけが湛えていて。~~

☆ はぐれた男が歩いてゆく
ある人間をさがしてゆくことが、
はぐれてゆくことなのだ
☆ 母をもとめて3000里

【38頁】

☆ 死者。 波面
 やっぱり はつきり死者を主人公としなければしかたがない。
 (4月12日
 午前2時)

~~☆ 蟹
 紐をたらすと簡単に蟹はくいてきたくる蟹みたいに
 死者は簡単にこちらに近づいてきた
 (しかしあちらがどこにあるのかそれはさっぱり見当もつかない)~~

☆ 死者は前にもうしろにも影をおとさなかった

☆ 死者は火のなかに入れて粘土みたいにたやすく焼きあがった
 (しかし壺はいつもひびわっていて水をはることができなかった)

~~☆ 赤い蟹と青い蟹
 青い壺と赤い壺
 しかしどちらもどちらに
ひどく似ている。
 のではないだろうか、ひびわっていて。~~

【39頁】

ラスト きれいに 拭いとっている
 ☆ 死者はいつも 白い泡をふいている
~~それだけが 生者との違いだった。~~

の

☆ 生者の祈り ■ 果肉からをもたぬか
は
 死者でないものから ススリおえられる

~~☆ 古びた死者は自分でさえ 自分を見まわることがあったから~~

☆ すかし彫りなんて
 どこにもありはしない

☆ 波面なんかじゃない陽炎だ

~~☆ 宙に突きささって 背中をそら
 した 岬 折れた岬の
 光 端
 垂れ落ちる 潮流の縞の波
たまま凍てついた 黒と白~~

【36頁】

4月10日～11日
一昼夜やってみて
失敗だ。

- ☆ どうもウマクないね。
- ☆ まだ話がうまれる状態ではない。
- ☆ おびき出すのだ、これから。
- ☆ “相聞”か

☆ 野火をとめる川が
壺の刻文となって流れている。

☆ 隆文——呻きは祈りにせばめられて
隆文となつてくねつてゆかざるを
えない

||
蛇は(しかし)祈りの■■■■匂い
肉壁を食いながらのぼつて

☆ やはりもつと激越な超自然を出
さなければイミないよ。

☆ 死ねという声が走つた たちまち
火山が爆発した
——いつも 大地はゆれていた

【37頁】

☆ 境界 題 文様 やはり
あちら と こちら を△テーマ
にする

- ☆ 釣られる魚
- ☆ 土の下と上 → ダメだな。
- ☆ 壺のなかとそと
- ◎ 冷えた水と熱湯。

☆ 壺のなかからにしみでる。

☆ 取られる鳥みたいに ■たやすく

た
あちらの死者は こちらで もがいた

☆ 氷の下の氷みたいに、月の夜は
ぶち割れても

幾枚も重なつて

月の夜の底に

朝 に

☆ 肉の下の肉みたいに 暁△の雲は
幾枚も朝 ■焼けの ■底で
逃げないでいた。

☆ そしてそのなかを 釣られる魚
みたいに 死者は跳ねながら
餅をのだえた
吊りあげられていた。水平に。

☆ 距離は煮こりみたいに

【34頁】

タイトル
水鏡
相馬へ。

- ☆ 観念をいれないと少しも面白くならないのだ
- ☆ 希望は背後から が照らす
背後にさがった希望だけが
だ■けだったから
山はいつも 片頬そぎ落ちていて
- ☆ 片頬そがれた山なみの向う側の
うしろ首■
でまだ
希望は凍りついてふるえていた
原始という文字を知ることのない山々は
また未来の 青い潮 ← 樹林
雲のゆくえを思うこともなかった
- ☆ 裸の肉には人間の血管のいれず
みが浮き出ていた
- ☆ そして死んだものほよみがえってばかりいた
崩れて山となること に戻ることのない湖の崖っぷちで
折れたキノコみたいに 糸をひいて
また折れて → 滝の
光るキノコとなったにせよ

【35頁】

- ☆ あの世へ ^{あちら}いったものは この世へ ^{こちら}
帰ってきてばかりいた。
境界などといえるものもまだできてはいなかった。
- ☆ 「いいあんばいだね」というのが
その帰還の挨拶。だが、こちらのものはそんなとき「ごころうさん」といえばそれでよかった。
あちらのことを訪ねてはならなかった。 たず
- ☆ 境界は空間にも時間にもなかった。
あるのはただ 大開 神だった
(人間はつかのまだけあらしめられたのではなからうかと
と なかなか死ねない老婆は
水鏡に顔をうつすたびに考えた

- ☆ まるで 釣られる 魚みたいに
簡単に あちらからこちらに
死者たちはやってきた
- ☆ 太陽を見つめすぎ■たあとのまぶたのなかのように
- ☆ 文様だ
天井裏から
垂れ落ちる
雨水
にみた

【32頁】

☆ 文様 (4月2日より1週間で書いて A)
《相馬》へとどけること。

激超な超自然を = 水鏡

じつはこのパート
のラストだ
この位置は

☆ 縄で女の肉をしぼりあげる
(叩くのはよしにしてやる)

☆月の光が逃げこんだからと
いって花(竹の管)のが笛と
なって鳴り出しはしない
が 濡れ■笛となりはしない
のだから て

☆ 竹■をとがらせて突き差す

☆ ひるを まといつかせて 吸わせる

☆ 文様とは境■界なのだ、
境界の刻まれた地図なのだ。

考

魂はまだ鳥という名でしか呼ば
れていず、したがって籠はなくて
あるものはただ壺深鉢だった
(鳥はそこからとびたつばかり)

ここから
出発

☆ 文様の底には滑車と紐と蝶番が
あるのだ

【33頁】

☆ 叩くのはもっとあとだ

☆ 蛇をはわすのはずっとさきだ

☆ 火を に あぶるのはすごく
ゆっくりだ

☆ おしつぶすのは 切るのかな 世の中で
おれのいない
はるかなはるかなあとのそのさきだ

☆ 野火が近づいてきている

☆ 女の具のなかで蜚が死んだ
肉 貝 消えた

観念は死んでも

☆ 死んだ観念は薪にならない

☆ はじけそこねた 暁の種子
野火が燃えはじめている

て踏みしだかれた

☆ 野火が近づいてきていた
(死んだものはよみがえってばかりいて)

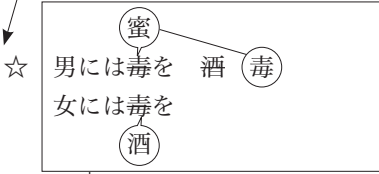
文様は刻印であるわけではない

◎折れたキノコ

☆ 少女が泣くのは まだ美しい
泣き続けるのは まだ 悩ましい
しかし老女になっても なお 泣
き続けているのだとしたら

☆ あの男には毒をのませしてきた

☆ ■折れた茎のさきについてる花
として



そして集聚のすべてには火を

【23頁】

火箸で

☆ かき乱された燐みたいに
 { 燃えている花びら
 { えぐられて血まみれな乳房。

【24頁】

☆ 近代人は神を信じないと信じている。
無神論を信じていると信じている。
だが、じつは科学を信じているにすぎない。科学は才能だとは思わないくせに、自分の信念のなかでは科学を才能た■らしめている。だが、わたしたちは非科学的なるものを信じないでは一日も生きることができないのだ。そのわたしたちを近代人を、生かしている信(=学)について語らなければならない。

(■3月27日)

【25頁】

空白

【26頁】

☆礫

☆ ヤジリは突きささっている

■は見■えないのだけれど

矢

ヤジリが動かないからには

肉はふるえているのではなかる

うか

痛みに

☆ 刑場

☆ いけにえに墳墓はない

☆ 竹の槍

☆ 野火

【27頁】

空白

【28頁】

☆ なぜ火焰

——火焰土器の1

金環 → このテーマで (B)

【29-31頁】

空白

【11頁】

☆実現のためのメモ

- a 毎週土曜朝～午後3時まで原稿
に書く事。
- b 毎週日曜夜10時から全体をう
けて
ともかく一篇完成させること。

↓

- ① 9月4日(日)夜10時から夜中まで
かかって一篇仕上げることだ。

☆ 11月21日以後 毎朝20分縄文
毎夜(ねる前)20分
縄文。

【12頁】

Notes

- ① のめりこみ、つきぬけて、
mystiqueのところまで。 [78']
それができなきゃあ！ [1月12日]

える

- ② 見えるものは見えないものだ、聞えない
ものは聞え ■ないものにふれている。
それでは存在するものは存在しない
ものに？ (ノヴァーリス)

この関係のたれたところ
おれの縄文が発生する

【13-19頁】

空白

【20頁】

詩集“縄文”のためのノートの続き

(1977年2月19日)

☆ 書割りだけが「縄文」であって
はならないのだ。

(8月25日)

☆ 「縄文」は、なかなか成就しえな
い詩集だ。やはり1日30分ここ
に帰ってくるのを怠ると、もう、
もろもろのイミでダメだったん
だな。

本日以後、日課を果すぞ

(77年11月21日一月一 夜8時)

☆《縄文》まだ16篇。78年2月11日記。

小さいもの、あと4篇ほど。

■ ■三善晃さんの音楽のために

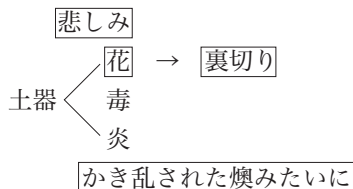
3月10日から集中するぞ。

【21頁】

空白

【22頁】

- ① サンケイ 詩の教室のための作品
(2月19日～20日まで)



☆ 乳房は崩れた燗みたいに ■まだ
らに熱かった

☆ 泣くことは許さぬ。

☆ 遠い丘のしげみの赤い花

【6頁】

〔B〕縄文現実 (今まで書いてきて)
行わり (いるもの)

13篇 ~ 15篇 10篇 36頁

主語 ところどころに
“わたし”

【7頁】

〔C〕少年詩 (戦争中) 7篇

→ 現代のイメージを多用して

- ① 散文詩 25字×20行
- 1 橋 (鉄の、コンクリートの) 14頁
- 2 書物 (歌のでてこない美しい■撰)
(歌だけのはいつていない美しい撰)
- 3 戦争ごっこ 使ったよ
- 4 無以前からすぐ無以後に
- 5 飢餓(飛行機の)
- 6 空襲(星の)
- 7 花火(眼りの) — 花火が落ちなかった
ので花火の映っている水のほうが
落ちていった)

◎赤黄青 の三つの信号はいつから

あったのか → このパートはこれか
わたしたちは(おれたちは)
赤に犯されている(青年ではなくて)
黄年だった いつまでも。
そしていまは若年だというな。

【8頁】

〔D〕ラスト (キミとボク)

100行くらい (6頁)

【9頁】

空白

【10頁】

“続縄文” 構成および目次

1979年60才記念に出すものが“続縄文”だ。

(1) “相馬”にあてて77年8月1日以内
で書くもの以後が《続縄文》
だ。
これより12回“相馬”に。し
たがって79年6月1日シメ切
まで。

① ②

“相馬” 77年10月1日 シメ切 12月1日、
78年2月1日③、4月1日④

☆以上 ■4篇が「縄文」。あとは
続縄文。

制作日録

☆ 2週間に2作、1月に4作のペース
で行くこと。

① 8月28日午後5時現在。

9月6日 までに一作。8月29日より
原稿用紙に書きはじめること。

貨幣

(2) 日程

- 朝1時間考えること。
- 寝る前に40分書くこと。
- 飲む日は出発前40分原稿用
紙に書くこと。
- 8月29日より実行のこと。

☆77年8月20日以降、のめりこむ。みの態勢が■しだいにかたまる。本格的に集中してしまうのは、78年2月15日～
 ■3月31日だぞ。(8月29日朝10時)

☆“縄文”の序に 一行小さく
 《歴史などありはしなかったのだ》

(78年77年)
 8月29日朝
 11時半

【4頁】

《縄文》 全体の構成=120頁以内

80
 A { 葬送 100行前後 (6頁)
 よ友へ { 宇宙衛星 80行前後 (6頁)
 びか { (峰岸よ、きみたちはおれにお
 かけ { いつきおれを追いこして ど
 きみと { こへゆくのか ——はるかな
 ぼく { 地球外でのドッキングなのか。

☆ 彼らが死んだのに の どうして自分は生きているか？
 そこで彼は自分の生を死に似させたのだ(エリカ、ジョンG
 《飛ぶのが怖い》) — P.168

☆ 呼びかけの相手としての“娘”
 峰岸の娘、桔梗のキョウコ 詩篇

☆ おれの生の汚辱■と
 ■断ちきらして おきたいから
 きみは 縄文土器でいなければ
 ならぬのだ(おれの息子は
 犯罪者となって生きているぞ)

【5頁】

(縄文の神=絶対をおびき出すために)

〔B〕 縄文幻妖(童話世界)

→散文詩 (入沢康夫の詩が、か さまざま主語を與えてくれる)

星。たえず天体神話が鳴つていなければならぬ。赤い太陽。紫いろの月。三つの太陽。七つの月。
 1 篇ぐらいでいいのだ。(20字×30行ぐらい)
 1 王 1 篇3頁×7
 2 トーテム・ポール (21頁)
 3 貨■幣
 4 語り(いけにえ)
 5 音楽
 6 旅
 7 海
 8 星→星はまだ13しか天体になかった

【表紙】

縄文から続縄文へ

1977年8月28日より

生活の中心

1977年2月18日～

宗左近

【表紙裏】、【インデックス】、

【インデックス裏】

空白

【1頁】

《縄文》 三十数篇

120頁前後

◎1976年～1978年5月完のこと

正味2年半だ 1

(1976.4.2■日)
記

☆1978年9月1日刊行のこと

↓ 8月15日

78年5月15日入稿のこと

3月31日完稿のこと

(あと1年だ。4月22日記)

1年で24篇。毎月2篇

☆やはり10日に一篇だ。

まず 5月20日に一篇

☆1978年7月20日刊行

4月20日入稿だ。

☆1978年3月15日～4月10日 清書

2月1日～3月15日

10篇書く。

残り 16 篇 だ な。	77年 9月	3篇
	10月	3篇
	11月	2篇
	12月	2篇
	1月	2篇
	2月	2篇
	3月	2篇

【2頁】

縄文刊行のため 40万円用意する事。

定価0.2万×500部=100万(≒80万)

200部買って 36万円也

☆詩集《縄文》完成のための準備。

(78年4月24日記。いよいよギリギリだ)

☆ (A) 4月25日以降——5月31日まで
毎日少くとも1時間集中する。

(B) 上記期間中、完全集中日は10日か。
これで5篇つくる(三善さんのため)

1篇に2日かかるのだ。

【3頁】

☆77年2月27日から少くとも10月31日

までは、“戦没学生”と“一高”と“縄文”
とに集中しなければならぬ。今年は正
念場だ。

(2月27日)

☆「縄文」とは峰岸よ、きみを生きかえ
らせて追いやる世界のことだ。

(77年8月23日)

北九州市立文学館紀要 第6号

2024年3月31日 発行

編集・発行 北九州市立文学館
北九州市小倉北区城内4番1号
電話 093-571-1505

製 作 株式会社ゼンリンプリントテックス

※凡例については、各論考に記しました。

※現在では適切でない表現の見られる資料があります。当時の社会状況を理解するため、そのままとしました。御理解の上、御了承ください。

※本内容の無断複製、転載等の行為を禁じます。